

# 小規模校生徒の討論する力を高める遠隔合同ディベート学習の一考察

鋤先良浩（高森町立高森東学園義務教育学校）・山本朋弘（鹿児島大学大学院）

概要：中学校社会科において、生徒の多面的・多角的に考え、討論する力を高めるために、小規模校だけでは実施が容易ではないディベートを遠隔合同授業で実施した。Web 会議を用いたディベート学習では、意見の対立を経験し、相手を説得するために根拠を用いて説明することができた。さらに、互いのアイデアを出し合いながら考えていく様子が見られ、もっと根拠を持って相手の主張に反論したい、相手を説得したいという意欲を高めることにつながった。

キーワード：小規模校、遠隔合同授業、ディベート、説得、討論する力

## 1 はじめに

議論を通して、互いの考えを伝えあい、自らの考えや集団の考えを発展させることなどを通して思考力・判断力・表現力等の育成を図る工夫が求められている。文部科学省（2017）の中学校学習指導要領解説社会編の公民的分野では、「現代社会に見られる課題について公正に判断したりする力、思考・判断したことを説明したりそれらを基に議論したりする力を養う」ことを目指して、「議論などを行って考えを深めさせる工夫」が求められている。また、中央教育審議会（2012）では、有効なアクティブ・ラーニングの例として、グループディスカッションやグループワークとともにディベートが示されている。小規模学校においては、学級内の生徒数が少ないため、ディベート等による議論などを行うのは容易ではなく、対話的な学びも十分に深まらない現状にある。

そこで、本研究では、他校と Web 会議を利用した遠隔合同授業を展開することで、小集団におけるディベートを行うことにした。ディベートを通して、根拠に基づいて相手に自分たちの主張を伝えるためにはどんな情報が必要なのか、どんな説明をすればよいのかを同じグループの生徒と相談しながら考えていくことができる。また、自分だけで考えたり、伝えたりすることが苦手な生徒でも、ディベートを行うことで同

じ班の仲間と相談しながら自分たちの主張をすることができる。

社会科（公民的分野）におけるディベートの活動を通して、多面的・多角的に考え、根拠を持って自分の意見を主張することや相手の意見を受けて、さらに自分の意見を主張するという討論する力を高めていきたいと考えた。

## 2 研究の方法

### （1）調査対象

中学校3年生26名（本校3名、交流校23名）を対象に、社会科（公民的分野）において、単元名「私たちがつくるこれからの社会」（教育出版）での実践を行うこととした。実施時期は平成29年7月である。また、授業の様子をビデオで記録し、発言回数や発言内容について確認し、授業後の振り返りをワークシートに記述するようになった。

### （2）実施形態

本実践では、テレビ会議システムを用いて、遠隔合同ディベートを実施した。単元の学習計画については、表1に示す。はじめに、ディベートの流れやルールについて説明し、ディベートがどのようなものかを体験した。その後、第3時でもディベートを行った。ディベートの流れは、最初にテーマについて各グループで考える時間をとった後、肯定派と否定派それぞれの立論、反論の準備のための作戦タイム、否定派

と肯定派の反論，傍聴者からの質問，最終弁論に向けた作戦タイム，肯定派と否定派の最終弁論の順で行い，最後は傍聴者による判定を行った。それぞれの場面で，1人の生徒ばかりが発言することのないように，それぞれのグループで担当を決め，1人1回は立論や反論などで代表として発表する機会をつくることとした。

本単元では，4時間すべてで，同一町内の中学校との遠隔合同授業を実施することとした。その際に，2つの学習形態を設定してディベートを計画した。2つの学習形態を図1と図2に示す。図1は，本校生徒3名全員が反対グループ，交流校6名が賛成グループと傍聴者グループで1つの討論グループ（計9名）を構成することとした。図2は，本校生徒を交流校との討論グループに1人ずつ配置（本校生徒1名，交流校生徒8名）することとした。

### 3 結果

単元の第1時では，「部活動の練習場所の整備や片づけは1年生がすべきである」というテーマで単独グループ型のディベートを行った。写真1は，第1時の様子である。生徒が自分たちの主張をしっかりとものにしようと経験や知識を活用し，自分たちなりに考えて，意欲的に取り組んでいった。また，相手校の主張に対しても，根拠として十分なのかを吟味し，より良い方法を考え，提案するなどの様子が見られた。

単元の第3時では，第1時に取り組んだものとは異なる，合同グループ型のディベートを行い，「部活動の練習場所は，人数比で決めるべきである」というテーマで実施した。前回とは異なり，普段の学習で話し合っているグループではないが，今までさまざまな教科で遠隔合同授業を経験してきており，司会を自分たちで決め，お互いの経験や考えを出し合いながら，写真2のように話し合いを進めた。

### 4 考察

表2は，ディベートにおける発言回数（グループ内の発言とテレビ会議やWeb会議を通じた発言の合計）を示す。単独グループ型では，

表1 単元の学習計画

時	学習内容
1	ディベートについて知り，体験する。（図1，写真1）
2	資料を通して，きまりやルールが必要な意味について，多面的・多角的に考える。
3	「部活動の場所は，人数比で決定すべきである」について，ディベートを行う。（図2，写真2）
4	「部活動の場所」について，対立から合意に向けた新たなルール作りのあり方を考える。

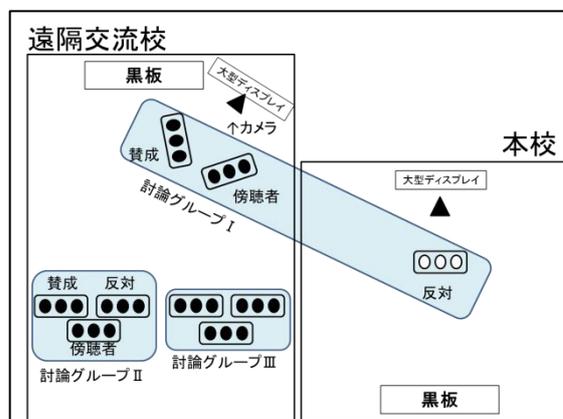


図1 遠隔授業の形態（単独グループ型）

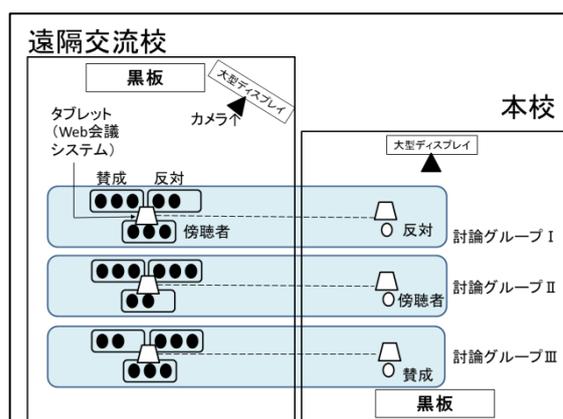


図2 遠隔授業の形態（合同グループ型）

特に司会を置かずに話し合ったため，3人の発言数は，ほぼ変わらない。発言回数は，自分たちの主張につながったもののみをカウントして

いるが、うまくまとめることができず相手に伝わらないような発言も見られた。表3は、作戦タイムでの発言内容である。自分たちの経験を中心に話が進んでいるが、根拠としては薄い。普段の学習で、意見の対立を経験することが少なかったためか、相手の主張に対して納得する様子も見られた。

合同グループ型では、生徒Aと生徒Bは司会として最初に話を始めたり、話の内容をまとめたりしており、2（交流校）対1（本校）のグループ編成でも発言回数は、少し伸びが見られた。生徒Cのグループでは、交流校の生徒が中心となって話を進めたため、交流校主導で話し合いが進んでしまい、発言している回数も時間も交流校が多くなってしまった。しかし、表4に示す発言内容では、交流校との意見交換は、説得力があるものが多く、グループの発言を整理して生徒Cが発言したときでも、根拠がしっかりした説得力のある発言をすることができた。



写真1 ディベートの様子（単独グループ型）



写真2 ディベートの様子（合同グループ型）

表2 ディベート時の発言回数

	単独グループ型	合同グループ型
生徒A	1 1	1 2
生徒B	1 1	1 3
生徒C	1 0	6

表3 作戦タイムの発言（単独グループ型）

生徒B：大人になって、後輩だけに任せているとダメになる。

生徒A：だらしない。

生徒B：気が利かない大人になる。

生徒C：人に任せっきりになる。将来、何もできない。社会で生きていけない。

生徒B：もし、1年生が少なかったら…。

生徒A：あつ、3人でえらい大変だった。

生徒C：1年生がもし少人数だったら、1年生だけじゃ無理。

表4 作戦タイムの発言（合同グループ型）

交流a：反対の意見として、部活動ごとに試合のコートの広さとかがあるから、各部活の1コートあたりの面積で決めればいいと思う。あとは、試合が近い部活とかを優先にして使うようにした方が良い。時間で使える方が、広く使えるし、広いと有意義に使うことができる。

交流b：上手な人がいっぱい使えば…。理由にならないか…。何か意見はありますか。

生徒C：一度に練習すると、多いとあまり練習できなくなるから、時間で分けた方が良くと思う。

学習後の生徒の感想を以下に示す。

- ・ やってみると意外に難しかった。自分たちの意見に反論されると何も言えなくなってしまった。次に意見を言う時には、根拠をしっかりと持って、主張や反論をしていき

たい。

- 自分の主張や相手の主張に対する反論を、しっかりとつき通すことは難しいと思う。自分たちの意見に反論されたときに納得してしまい、意見に自信がなくなるときもあった。もっと自分の経験などをいかして討論していきたい。

これらの感想から、まだ自分たちの主張をしっかりと貫き通し、相手を説得していくことに対して、苦手意識があることがわかる。しかし、しっかりとした根拠を持ったり、自分たちの経験を使って相手を説得したりしたいという思いは持っている。今後も継続して、根拠を持って話すことやディベートの取組を行っていくことは学習の意欲を高めることにも効果的であると考える。

## 5 結論

本研究で得られた成果を以下に示す。

- 単独グループ型でディベートを行うことで、自分たちの経験を重ね、共感し合いながら話し合いを進めることができた。
- 単独グループ型でディベートを行うよりも合同グループ型で行うことで、より根拠のしっかりした主張を行うことができた。
- 小規模校の生徒は、相手を説得したり、納得させたりすることに対して自信がないが、もっと取り組んでみたいと意欲を高めることができた。

## 6 今後に向けて

今回の実践では、学校での問題を中心に持ち上げたので、比較的考えやすく、ディベート自体も社会科の学習の中で得た知識よりも、自分の経験などから根拠を考えることができた。

今後は、より高度なディベート題材を考え、実施していきたいと考える。例えば、人の権利と権利が対立するような題材や日本国内や地球全体で考えていく必要がある題材などさまざまな立場や見方で考えることが必要な問題である。授業の中で学んだ知識や技能を十分に活用していくことで、生きた知識とすることができる。

そのために、今後も継続して遠隔授業でのディベートに取り組んでいきたい。

## 附 記

本研究は、文部科学省委託事業「人口減少社会における ICT の活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」における高森町での実践成果の一部をまとめたものである。

## 参考文献

文部科学省(2017) 中学校学習指導要領解説社会編

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/04/1387018\\_3\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/07/04/1387018_3_2.pdf) (accessed2016.7.17)

文部科学省(2011) 言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力の育成に向けて～【中学校版】

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/gengo/1306118.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1306118.htm) (accessed2016.7.17)

中央教育審議会(2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf) (accessed2016.7.17)